

平谷村誌 上巻

目次

口 紋

序

発刊に当たつて

題 字

凡 例

平谷村長宮澤厚孝
村誌編纂委員長 小池筆男

同 同

第一編 自然環境

第一章 地形と地質

- 二 高原性の山地 九
- 三 小起伏山地 一〇
- 四 平頂峰の蛇峠山 二
- 五 奥山地帯 三
- 六 平頂性のスカイライン 八
- 七 傾動している小起伏面 六

第三節 溪谷の特徴と河川景観

- 一 平谷村の水系 一〇
- 二 平谷高原の入口には、喉の滝とボットホールがある 三
- 三 ボットホールはなぜそこにできるか 四
- 四 鞍の谷地形 五
- 五 鞍の大滝と小滝 五

第一節 地形および地質的にみた平谷村の位置

- 一 矢作川最上流部の村 三
- 二 三河高原と平谷村 六
- 三 地質的な位置と基盤岩類について 七

第二節 山地の特徴と山地景観

- 一 村の山々 八
- 二 山地の特徴 八
- 三 山地景観 七

六 岡平沢にはいくつもの小滝がある

二七

七 平谷川渓谷の掘り込み蛇行

二七

八 平谷川渓谷の滝と淵

二七

九 入川上流部の瀧滝

二七

十 牧歌的な大椋沢流域の渓流

二七

第四節 地質現象と自然景観

一 平谷村の段丘

三三

二 段丘の発達とその背景

三三

三 三河高原の隆起と段丘の形成

三三

四 鷹巣山の崖錐状斜面

三三

五 岩塔（トア）としての粒良岩

三三

六 花崗岩の風化作用

三毛

第五節 断層地形と地盤運動

一 平谷村の断層系

三元

二 昼神断層は三州街道断層系を代表する断層

三元

三 昼神断層と温泉

三四

四 平谷村一帯の断層系

四四

五 村の中央を南北にとおるヤハズ峠断層

四五

六 断層がつくり出した地塊構造

四四

七 水系と断層鞍部

四五

一 主構造をつくる断層

四五

二 主構造と直交する断層

四五

三 南北方向にとおる断層

四五

四 断層がつくり出した地塊構造

四五

五 水系と断層鞍部

四五

六 水系と断層鞍部

四五

七 水系と断層鞍部

四五

一 降水量

一充

二 降雪量

二充

三 充

三充

四 充

四充

五 充

五充

六 充

六充

七 充

七充

第六節 平谷高原の来歴

一 切峰面図で示される美濃三河高原

二二

二 三河高原ブロックが隆起する以前

二二

三 三河高原ブロックの隆起

二二

第七節 平谷村の岩石

一 どのような岩石があるか

二二

二 領家帶について

二二

三 平谷川沿いの花崗岩の観察

二二

四 平谷村の村地区に分布する花崗岩類

二二

五 十郎田付近の變成岩

二二

第八節 合川上流域の地質

一 濃飛流紋岩類について

二二

二 氷河時代の礫層について

二二

第三章 気象と気候

二充

第一節 夏は涼しく、冬は寒さが厳しい

一充

第二節 年により量に変動の大きい降水量

一充

第三節 北西と東からの風が多い

一三

第四節 変わりやすい天気

一三

第五節 平谷における気象災害

一三

- 一 殆どの災害が大雨による洪水
- 二 厳しい寒氣・深い積雪・強風による災害

一三
一三

第三章 水

一三

第一節 飯伊で一番の多雨地帯

一三

第二節 生物は水によつて生きている

一三

第三節 川の水質は環境によつて変化する

一三

第四節 水道水はくせのない良い水

一三

第五節 「美人の湯」と言われる重曹泉

一三

第四章 土 壤

一三

第一節 土壤とその生い立ち

一三

第二節 土壤の構成

一三

- 一 土壤三相

一三

- 二 機械的組成（土性）

一三

三 化学的組成 四 土壤の分類

九一

五 平谷村の土壤

九一

(一) 平谷村の土壤区分 (二) 平谷の土壤分類区分の説明

九一

第五章 植 物

九一

第一節 植物の種類と分布

九一

一 概 観

九一

二 植物の分布

九一

三 地域の植物

九一

1 平谷川沿いの植物

九一

2 赤坂峠付近の植物

九一

3 大椋沢の湿地

九一

4 梨ノ木沢の湿地

九一

5 ござ小屋峠の植物

九一

6 蛇峠山の植物

九一

7 鞍ダム右岸の植物

九一

8 高嶺山の植物

九一

9 鯉子林道の植物

九一

10 大川入山の植物

九一

四 平谷村の主な植物

九一

五 帰化植物

九一

第二節 植物と生活

一〇 小哺乳類の分布の特徴

一 植物と民族	二〇
二 植物名と方言	二九
三 薬用植物	三〇
四 植物目録	三一
第五節 魚類の分布	三二
一 サケ科の魚たち	三三
第六節 動物	三四
第一節 平谷村の動物相の特徴	三五
一 日本列島における動物相の位置づけ	三六
二 特徴ある動物たち	三七
三 森林の垂直的変化に伴う動物相の変化	三八
第二節 哺乳類の分布と生態	三九
一 急峻な谷と森林に生きるニホンザル	四〇
二 証跡から見たニホンカモシカの分布	四一
三 高嶺に生き続けるイノシシ	四二
四 広葉樹林と結びつくツキノワグマ	四三
五 身近にいるキツネとタヌキ	四四
六 ウサギ道とノウサギの分布	四五
七 リスの分布	四五
八 テンとイタチとアナグマ	四五
九 分布を広げてきたハクビシン	四五

第三節 環境の違いによる鳥類の分布

一 集落地とその周辺の鳥	五一
二 カラマツ林を主とする林の鳥	五一
三 広葉樹林の鳥	五一
四 平谷川・柳川の鳥	五一
五 森林の鳥の日周活動（さえずり）	五一
六 留鳥と夏鳥	五一
第四節 ハ虫類と両生類	五六
一 ハ虫類	五六
1 ヘビのなかも	五六
2 トカゲのなかも	五六
二 両生類	五六
1 カエル類	五六
2 サンショウウオ類	五六
3 イモリ	五六
第五節 魚類の分布	五六
一 サケ科の魚たち	五六

二 その他の魚類	一 第二節 旧石器時代	一 第六節 甲殻類
一 次	一 繩文時代早創期	一 サワガニ
第一節 概観	二 繩文時代前期	二 ガ類で目につく種類
一 目	三 繩文時代中期	三 甲虫類
一 金	四 繩文時代後期	四 カメムシ類とセミ類
第一章 平谷村を中心とした遺跡の概観	五 繩文時代晚期	五 バッタとキリギリス類
一 金	一 弥生時代前・中期	六 ハチ・アリ類
第二編 原始・古代	二 弥生時代後期	七 ハエ・アブ類
第一章 平谷村を中心とした遺跡の概観	三 古墳時代	八 トンボ類
一 金	四 歴史時代（古代後半）	
第九節 平谷村の動物目録	五 中世	
一 丸	六 中世	
第八節 土壤動物	七 古墳時代	
一 丸	八 歴史時代（古代後半）	
第九節 平谷村の動物目録	九 中世	
一 丸	十 古墳時代	
第二章 平谷村の遺跡	十一 中世	
第一章 平谷村を中心とした遺跡の概観	十二 古墳時代	
一 丸	十三 中世	
第一節 清水遺跡	十四 古墳時代	
一 丸	十五 中世	
第一節 出土した遺物	十六 古墳時代	
一 丸	十七 中世	
2 治部坂遺跡で出土した遺物	十八 古墳時代	
一 丸	十九 中世	

第二節 平松遺跡

三〇一 伊賀良莊の領域

二 江儀遠山莊
一 江儀遠山莊の成立と伝領

三三

第三節 上の平遺跡

三〇二 江儀遠山莊の領域

三三

第四節 わらび平遺跡

三〇三 江儀遠山莊の領域

三四

第五節 新田遺跡

三〇四 江儀遠山莊の領域

三四

第六節 八幡社付近遺跡

三〇五 江儀遠山莊の領域

三四

第七節 寺地遺跡

三〇六 江儀遠山莊の領域

三四

第八節 キミイ寺跡遺跡

三〇七 江儀遠山莊の領域

三四

第九節 城館跡

三〇八 江儀遠山莊の領域

三四

第三編 中世

第一章 鎌倉時代の平谷

二九 伊賀良莊の領域

三三

第一節 鎌倉時代の概観

二九

三三

第二節 荘園の成立と展開

三〇

三三

一 伊賀良莊

三一

三三

1 伊賀良莊の成立と伝領

三二

三三

2 伊賀良莊地頭北条・江馬氏

三三

三三

第二章 室町時代の平谷

第一節 室町時代の概観

三三

第二節 南北朝の対立

三三

一 南北朝の争乱

三三

二 南北朝と伊那の諸族

三三

第三節 浪合戦と尹良親王

三七

一 尹良親王

三七

二 浪合の戦い

三八

三 浪合戦死の宮

三九

第四節 戦国時代の平谷

三〇

一 関氏の支配

三〇

1 関氏の出自と新野来在

三〇

2 関氏の勢力伸長

三三

3 関氏の滅亡

三三

二 下条氏の支配

三三

1 下条氏の出自

三三

第四編 近世

第一章 支配関係

- 三 理性院厳助の比良屋通過 三四
 1 厳助の下向 三五
 2 厳助の帰京 三五

- 四 武田氏の伊那侵攻 三六
 1 伊那の攻略 三六
 2 武田氏の伊那領有 三七
 3 武田氏の伊那管治 三七
 4 信玄の上洛準備 三八

- 5 滝之沢城跡 三九
 6 滝之沢関所跡 三九
 7 武田氏の西進 三九
 8 信玄の終焉 三九

- 五 武田氏の挫折 三九
 1 信玄の没後 三九
 2 長篠の戦い 三九
 3 勝頼の態勢たてなおし 三九

- 六 織田氏の侵攻 三九
 1 滝之沢城の落城 三九
 2 武田氏の滅亡 三九

- 七 家康・秀吉の支配と平谷 三九
 1 徳川家康の支配 三九
 2 武田氏の富山移居 三九
 3 下条氏の勢力伸長 三九
 4 下条氏と関氏の抗争 三九
 5 下条氏の伊那来在 三九

第一節 江戸時代の概観

- 一 毛利秀賴 二
 二 京極高知 二
 三 小笠原秀政 二
 四 熊谷玄蕃 二
 五 宮崎氏 二
 六 村上源助 二
 七 知久知行所 二
 八 飯島代官所 二

第二章 初期の支配形態と村

第一節 近世村落としての平谷村

一 明細帳に見る平谷村

<p>第四章 山林の利用と山論</p> <p>第一節 山林の利用と入会山 三九</p> <p>一 山林の利用 三九</p> <p>二 入会山の利用 三九</p> <p>第二節 近村との山論・境論 三四</p> <p>一 平谷村と和合村との境論・山論 三四</p> <p>二 根羽村との赤坂の山論 三四</p> <p>三 平谷村と浪合村の境論 三四</p> <p>第三節 木地師の入山 三四</p> <p>一 木地師の発生と伝承 三四</p> <p>二 木地師への綸旨・諸状 三四</p> <p>三 氏子狩 三四</p> <p>四 巡回路 三四</p> <p>五 筒井八幡社の氏子駆帳 三四</p>	<p>第五章 江戸期の交通</p> <p>第一節 伊那往還と平谷宿 三九</p> <p>一 脇往還伊那街道 三九</p> <p>二 宿駅制度 三九</p> <p>三 宿駅制度の用語 三九</p> <p>四 滝之沢御関所 三九</p> <p>五 伊那街道（三州街道） 三九</p> <p>1 伊那十六宿 三九</p> <p>2 平谷の道 三九</p> <p>3 その他の平谷の道 三九</p> <p>六 通行手形と庶民の旅 三九</p> <p>1 昔の旅 三九</p> <p>2 往來手形（旅行証明書） 三九</p> <p>3 信仰の旅（靈場巡礼の旅） 三九</p> <p>第二節 商品流通と中馬 三九</p> <p>一 出馬千匹入馬千匹 三九</p> <p>二 中馬の発達 三九</p> <p>三 中馬の紛争 三九</p> <p>四 明和の中馬裁許 三九</p> <p>五 中馬の荷物 三九</p> <p>六 中馬稼ぎ村と中馬数 三九</p>
---	--

第五編 民俗

第二節 母屋 四〇四
第三節 付属の建物 四〇六

第一章 衣生活 三五

第一節 仕事着 三五
第二節 織物と染物 三六
第三節 和裁・洗濯・縫い返し 三七

第二章 食生活 三九

第一節 平常食 三九
第二節 餅の類 三九
第三節 その他の食べ物 四〇
第四節 食糧の貯蔵 四一
第五節 飲食の用具及び炊事 四三

第五章 村の生活 四四

第三章 住生活 四四
第一節 仏教信仰 四八

第一節 家を建てる条件 三六
第二節 母屋 四〇四
第三節 付属の建物 四〇六

第一節 耕地と稻作 四〇七
第二節 養蚕業 四〇九
第三節 林業 四一〇
第四節 漁労 四一三

第一節 同族・近隣・村づきあい 四四
第二節 権利と組織 四四五
第三節 年齢集團 四五六
第四節 親族関係 四六

第六章 信仰 四八

第一節 仏教信仰 四八

第二節 安全・生産祈願	四九	第四節 厄年と老年	四五
第三節 願かけ・山岳信仰	四三	第五節 葬式・年忌	四五
第四節 浅間神社の行者修業	四五	第六節 年中行事	四六
第五節 講	四七	第一節 年中行事と祭礼	四六
第七章 民俗知識	四〇	第二節 特色ある平谷村の行事	四七
第一節 前ぶれ	四〇	第一節 地芝居から座敷芸へ	四八
第二節 占い・まじない・物忌み	四〇	二 旅芸人による興行芝居	四八
第八章 民間療法	四一	第一節 興行芝居の時代	四八
第一節 民間療法	四一	2 露天の舞台から屋内の舞台へ	四八
第二節 民間医薬	四一	3 興行芝居の一座	四九
第九章 人の一生	四二	第一節 地芝居の起源	四七
第一節 妊娠・出産・乳児	四二	第二節 興行芝居	四七
第二節 少年・青年	四三	第一節 地芝居から座敷芸へ	四八
第三節 結婚	四四	二 旅芸人による興行芝居	四八
第三節 青年会による地芝居の復活	四五	第一節 興行芝居の時代	四八
第四節 歌舞伎保存会の発足と学校創立	四五	2 露天の舞台から屋内の舞台へ	四八
百周年記念行事の歌舞伎	四五	3 興行芝居の一座	四九

第五節 子供歌舞伎の発足

四五三

第十二章 伝 承

四五

第一節 伝説・物語

四五

一 雲谷寺の梵鐘と竜

四五

二 お寺淵の竜

四五

三 竜とあなん平の池

四五

四 長者屋敷とカラ池

四五

第二節 説 話

四五

一 てんぼう（隻手）吉五郎

四五

二 ござ小屋峠のおさばき

四五

三 赤子石様

四五

四 白竜様

四五

五 赤坂たんぽ

四五

六 山犬の話（三話）

四五

第三節 実 話

四五

一 中馬殺生乱闘事件

四五

二 二筋道の殺人事件（三ころりん）

四五

第四節 歌

四六

一 盆踊りの歌
二 平谷村村歌
三 平谷観光小唄
四 平谷小・中学校校歌
五 「深雪せる」の歌

xii

第十三章 方 言

四六

第一節 方言語彙

四六

第二節 比喩・形容の言いまわし

四六